

## 批判と領解(下)

行者として

自分のことは棚にあげて、他人のことばかり鋭く批判するのが凡夫である。しかしその批判し非難している自分を批判しなくてはならない。そこに念仏行者の生活がある。私は他人や人生や宗教の批評家であるよりも先に、一個の人間として、行者として、静かに与えられた道を私自身の荷物を背負って行歩する宗教人でありたい。その私であつてのみ私に対する批判や、非難は私への薬となる。

世には一人前にならない子供をつれた親や、悪い放蕩児を持った親がある。他人は傍観しながら、何とでも言つていられる。しかしその親はただ黙して受け取らねばならない。世を恥じ、心を痛めつつも、しかも、これを背負つて歩むより外はない。重い荷物を背負つて山坂を越えねばならぬ者には、ただ現前脚下を凝視みて歩むことが許されるだけである。冷たき非難が何とひびくであろうか。世のすべての人はみな重き荷物を持った旅人である。

一道

教えそのものや、宗教そのものをむ解剖したり、分析したりする学問も必要である。しかしそれは私たちの分野の仕事ではない。私たちは親鸞聖人の教えを拝受し領解して、仏弟子として忠実に歩みまきることだけを使命とする。それが今の時代の賞讃を買うか、罵倒の的となるかは考えなくてもいいことである。したがって聖人のみ教えは私たちにとつて絶対である。私たちは世のあらゆる苦悩や、様々な現実の問題を受け取りつつ、同時に発遣の教えの前に合掌して、念仏の一道を歩もうとする。

合掌して

六方礼経には、人間が沙門道士に向うべき態度を「善心をもつてこれに向へ。好き言を選んでともに語れ。」と言ひ、「恭敬承事して、度世のことを問ふべし」とある。求道者の心すべきことである。

世には腕白小僧がいる。美しい花園の中に鎌を振り廻せば、花はもろくも地におちるであろう。

ピストルや刃は犬や牛をたおすことが出来ると共に、積尊や聖人をでもほろぼすことが出来る。善意なく好言なきピストルの前には、聖人もまた人間という弱き動物であろう。

嫉妬、我執、怨恨、高慢等の鎌を磨いて正法の花園に入つてはならない。草花は鎌で切り得ても、正法は決して煩惱では斬れない。禍は必ず汝に還る。

正法の園には一切の批判非難を超えて、沈黙合掌して入るべきである。

だが正法は最初からすぐ耳に入るものではない。疑い、はからい、批判の心が必ずおこる。しかし正法は必ず内省否定の力を持つ。求めてゆけば、いつしかに、病を治しつつ、ついに無條件に正法の前に合掌せしめる。正法は盲従することを嫌うと共に、反逆の児にはその真相を観せない。

## 領解

領解するとは、領は受け取ることであり、解は解決することである。受け取ることなくして解決はない。いかなる問題でも受け取ったならば、必ず何等かの形で解決する。信心とは如来のすべてを受け取ることである。十年二十年も寺参りしながら、いい加減なことでぶらぶらしているのは、如来の大慈悲を真劍になつて領解しないが故である。如来を領解しないとは、同時に教えを領解しないことである。教法に合掌してこれを領解しないのは、教主の人格を領解しないのである。釈尊にでも親鸞聖人にも、これに我をもつて向い、いつまでも批判の眼を向けており、教法に対立しているのでは、教主をも教法をも領解することは出来ない。

私たちに対する教法や、私を教え導いてくれる長者は、時に剣道を教えるよりも先に、水くみや掃除や小使いにばかりにこき使う剣道師匠のように、故に冷たく鍛えるかも知れない。しかしその冷さに怒つて逃げて行つたのでは、長者の親切は永遠にわからない。

如来を領解するものは、自己を領解する。如来の鋭い智慧光をこぼむ者は又、自己の真実の相を知ることをごぼむ者である。我慢の強い者は、我慢の強いことをつかれることを嫌い、貪欲の深い人は、貪欲が深いとつかれて怒る。自己の相をそのまま領解することを拒むのである。しかるに念仏する心は、同時に静かに自の相に帰つてゆこうとする相である。信心には懺悔がともなう。懺悔とは己れにかえる相である。

ある地方では、芸者買いしようが、放蕩に身を持つが、「これが業だ」と言つて責<sup>2</sup>任を業にぬりつけ「そのどうにもならんのを、助けて貰うのだ。」と言つて、如来の超世の大慈悲をもそのまま、ずるい自己を許して、かかる言い訳に使つているようなところがある。かかる世界の人たちには、真の意味での如来の領解もなく、自己の領解もあり得ない。如来の智慧光なくしての自己の領解は難中の難であつて、これより至難はないであろう。しかして自己の正しい領解なくしては、ついに本当の落ちつきも、歓びも、生活もあり得ない。

如来を領解し、自己を領解するものは、人生をもありのままに領解する。人生を受け取らないでなされる念仏は、真に人生の光や力とはならない。

特に人生に於ける苦悩に対する態度こそは、その人の死活を決定する。父が苦悩の原因ならば、父に合掌して向かうべきであり、子供が苦悩の原因ならば、合掌の中に子供を領解すべきである。その他自己にふりかかる、あらゆる問題を合掌の中に受け取る時、念仏はありのままの中に輝きたもうであろう。釈尊、親鸞聖人は、人生のありのままの相を、ありのままに受け取られた方である。ありのままに受け取ることがそのまま生きる道を発見することである。

かくてすべての問題をありのままに領解する根本的態度こそ信心である。忍従や、精進や、懺悔や、歡喜や、感謝は、念仏生活にともなう一面の相である。